清流通信
四万十川物語
Shimantogawa Monogatari
第 188 章 通信日 ● 2012 年 6 月 25 日

〈送信者〉
財団法人 四万十川財団
TEL：0880-29-0200
FAX：0880-29-0201
E-mail: office@shimanto.or.jp
URL:http://www.shimanto.or.jp

特定非営利活動法人『四国自然史科学研究センター』=須崎市=

清流通信読者の皆様こんにちは。
今回は、特定非営利活動法人『四国自然史科学研究センター』の活動と、センター長の谷地森秀二さんについてお伝えします。

新荘川 と 四国自然史科学研究センター

幻の動物 “ニホンカワウソ”

1974 年 7月 25 日、高知県須崎市上分小学校そばの新荘川（しんじょうかわ）で、見慣れぬ 1 頭の動物が目撃され捕獲された（その後、直ちに放された）。これこそは、絶滅したとも言われていた“幻の動物”国の特別天然記念物“ニホンカワウソ”だったのだ。

当時このニュースは、日本中をかけめぐり、全国的話題となったので、記憶にある方も多いと思う。 その後もニホンカワウソは、新荘川流域で何度か目撃され、写真やビデオにも収められたが、1979年の目撃情報を最後に、日本中のどの川からも姿を消した。 それから30年あまり、ニホンカワウソは、今では “絶滅した可能性が高い”と考えられている。

四国自然史科学研究センター

四万十川源流点のある津野町不入山の東、鶴松ヶ森から始まるその流れは、津野町、須崎市を潤して、須崎湾へと注ぐ。 かつて、ニホンカワウソが姿を現したこの新荘川のほとり、まさしく、その動物が目撃された地点の前に建つ新荘公民館の中に、事務所を構える『特定非営利活動法人 四国自然史科学研究センター』 のセンター長、谷地森秀二さんを今回は訪ね、お話を伺った。

『NPO 法人 四国自然史科学研究センター』が、四国地方の自然史に関する調査研究活動を通じ、自然環境保全や復元、更には地域の発展に寄与することを目的に開設されたのは、今から 10 年程前、2002 年4月のこと。

「四国は、面積こそ本州・北海道・九州に次ぐものの、多種多様な要素を含む特有な地域生態系を形成しています。そこで、四国の優れた自然環境を次世代に引き継ぎ、また社会的・文化的基盤の発展に寄与するためには、四国全域を視野に入れた観点が必要であるということで、ここは設立されました。組織は、現在、常勤職員 3 名と非常勤職員 2 名の 5 名体制です。各自専門分野があり、自分はセンター長ですが指示系統はトップダウンではなく、多面的な活動をする並列的組織のイメージです。活動内容は多岐にわたりますが、組織としての中心事業は“野生生物の基礎調査・研究”で、他に自然史科学の記録、後継者の育成などがあります。」

動物の死骸が語るものは・・・

「野生生物の基礎調査・研究と言ってもいろいろあって、例えば、“野生動物の死骸調査”というのがあります。地域で発見された哺乳類・鳥類などの死体を拾得し、生息していた証拠として記録に残します。また解剖して、胃の内容物から食べた物を調べたり、生殖器を調べることで繁殖時期を把握したり、筋肉から DNA を取り出して遺伝情報等の調査をしたりもしています。また、最近では愛媛大学に協力し、野生動物における毒物調査をしています。これは人間が自然界に出してしまう毒物が、野生生物にどのような影響を与えているかの調査です。その他には、最近増加しているイノシシやニホンザル、ニホンジカなどによる農林業被害対策にも取り組んでいます。これは、駆除だけでなく“獣から守る”対策にも力を入れるようにしています。他に、日本の生態系を脅かす“特定外来生物”の調査などもしています。」

そして、四万十川流域をはじめ、高知県 及び 四国全域をフィールドとした調査には、 四国では環境省のレッドリストにおいて“絶滅のおそれのある地域個体群（LP）”（地域的に孤立している個体群で、絶滅のおそれが高いもの）に指定されている四国のツキノワグマの調査など、広範囲に及ぶものも多い。この調査では、先頃、四国山地に生息する野生ツキノワグマの撮影にも成功している。

四万十川流域に棲む コウモリたち

現在の谷地森さんの研究テーマの一つに、『高知県のコウモリ』の調査がある。

それは 4 年ほど前のこと。 仕事で訪れた四万十川で、谷地森さんは昼食をとっていた。ふと見ると、川を挟んだ対岸に穴がある。それは山の斜面を伝って引かれた沢の水が流れ出る水路で、「こういう穴にはコウモリが棲んでいることがあると、直感的に思ったのです。そして調べてみたら、やっぱりいた。」「調査を始めて5年目に入りましたが、四万十川流域でユビナガコウモリ、モモジロコウモリ、キクガシラコウモリ、コキクガシラコウモリ、テングコウモリの 5 種を確認しました。 このうち、モモジロコウモリ と ユビナガコウモリは、四万十川のすぐ近くで、子どもを育てるために利用する場所を見つけることができました。」

「しかし、高知では、コウモリについて解明されていないことがまだまだあると思います。私たちが研究を始めて、高知であらたに 3 種類（チチブコウモリ、コテングコウモリ、ノレンコウモリ）の生息を確認したことも、それを裏付けていると思います。」

「日本には 37 種（絶滅含む、種数は分類説により若干変動する）、世界には 1000 種ほどのコウモリがいると言われていますが、日本にいるコウモリのうちのほとんどが、レッドリストの“絶滅”や“絶滅危惧”、“希少種”などに指定されています。コウモリは洞窟や、木の洞、家の屋根裏などに生息するのですが、そういう場所が少なくなってきているのかもしれません。」

ご存じのように、コウモリは鳥ではなく、翼を持った完全な飛行ができる“哺乳類”である。その種数は哺乳類全体の 1/4 近くを占め、齧歯目（ネズミの仲間）に次いで大きなグループで、極地、ツンドラ、高山、一部大洋上の島々を除く世界中に生息しているという。

しかしコウモリは、吸血鬼やイソップ童話など何かと悪いイメージでとらえられることが多い。けれども実際には、他の動物の血を吸う種（チスイコウモリ）は南米などに生息するごくわずかであるし、高知県で確認されているコウモリは、夜間に蚊や蛾などの飛翔昆虫類などを大量に捕食し、生態系の一翼を担う重要な役割を果たしているようだ。 そしてコウモリが食べる昆虫の中には、カやガのように人の健康を害するもの、コガネムシの仲間などの農作物に被害を与えるものなども含まれていて、コウモリたちはこれら昆虫の数をコントロールしているとも考えられるという。 もしコウモリがいなくなれば、人にも大きな影響が出てしまうかもしれない。

ところで 2011～12 年は、『国際コウモリ年』ということをご存じだろうか。これは、“吸血鬼”や“不気味な動物”としてのイメージが強いコウモリの偏見を払拭しようと、UNEP（国連環境計画）が定めたもので、日本国内でもそれにちなんだイベントが開催されている。

「私たちも、来年 1～2 月末まで、越知町横倉山自然の森博物館を主な会場にして、“企画展『豊かな森にすまうもの－四国のコウモリ展－』”を予定しています。 この機会に、コウモリのことをもっとよく知ってもらえたらと思っています。」

“絶滅” という言葉を考えるとき

遠い記憶の中にある、夏の日の夕暮れ。 四万十川が正真正銘の清流だった頃、薄暗くなり始めた夕空に、金色に輝く無数のカゲロウが飛んでいる。す～っと舞い上がっては、ひゅるひゅると降りてくる。その中を素早く飛び交う黒い影。その黒い小さな生きものがコウモリだったと私が知ったのは、つい最近のこと。今は、あの光景自体が幻だったかのように、遠い、遠い、記憶の彼方にいってしまった。

「ところで、ニホンカワウソは、まだ、新荘川のどこかにいるのでしょうか?」

「そうですね、何とも言えませんが、昔とは環境がずいぶん変わってしまいましたからね。でも、四万十川支流の、たとえば黒尊川などの清流になら、いるかもしれないし、私はいて欲しいと思っています。」

唐突な私の質問に答えて、谷地森さんの優しい笑顔は少し曇ったが、すぐに明るく輝いた。

かつてニホンカワウソが泳いでいたその川は、今も水の透明さは変わらない。 しかし近年、瀬切れ（水量が減って水の流れが途絶えてしまう現象）が起こったり、多くの堰がつくられたために水生生物の遡上や下降などの移動が困難になったりして、水辺の生きものたちにとって大きな問題が生じ始めているという。いずれの問題も人間の行いと無関係ではないだろう。

“絶滅”とは、ひとつの生物種全てが死滅し、その種が絶えること。 地球の歴史の中で、恐竜が絶滅したように、生きものが絶滅するのは自然の成り行きではある。しかし問題なのは、近年のその“絶滅”が、かつてないスピードで進行していることだ。7 分に 1 種類の生物が地球上から姿を消しているとも言われている。そして、その多くの“絶滅”に、人間の活動が関与していることも、また事実だ。

今も穏やかに流れる新荘川。その流れを見つめながら、私は人間活動を原因とする“絶滅”のその意味を、深く、重く、考えてみた。

（取材/記事：矢野由美子）

写真提供：四国自然史科学研究センター

ユビナガコウモリ
左腕についているのは、個体識別用の標識

四国山地の野生ツキノワグマ

多くの場所で絶滅危惧に指定されているトノサマガエル

保護されたヒメアマツバメ